

馬英九総統レ임ダックで台湾政治混乱、来年の総統選、民進党蔡英文の不戦勝も

台湾の政治が混乱している。その最大の原因は馬英九総統。昨年十一月の統一地方選挙で国民党が惨敗し、馬総統は国民党主席を渋々と辞めた。任期一年余を残してますますレ임ダック化が進むとみられているが、どっこい馬総統はあれこれ悪あがきのパフォーマンス。それが政治の混乱を招き、来年一月の総統選挙を控えて国民党は適当な総統候補が出てこないという異常事態。このままでは民進党の蔡英文主席の「不戦勝」という声さえ出ている。

総統対立法院長の暗闘で日本食品輸入規制に

5月15日から台湾が実施した日本食品の輸入規制について李登輝元総統は「あれは日本が嫌いな馬英九が、他にやることがないからやっているだけだ」と喝破していた。日本と事前の協議もなしに台湾が一方的に実施を決めた輸入規制は日本がWTO(世界貿易機関)に訴えることも検討という不合理なもの。台湾側にも「おかしい」という声が出ている。

「なぜ、いまごろそんなことを」と訝る声に対する答えが李元総統の言葉だ。反日ともいわれた馬総統の本領発揮というところだが、それだけではない。東日本大震災以来、被災地の食品については輸入規制があり、それが徐々に緩和されているのが現状。それをさらに緩和し、規制解除に前向きだったのが、立法院(国会に相当)の王金平院長。直前に訪日し、被災地も回り、規制解除に前向きな「公約」をしていた。

その王院長は来年の総統選の国民党の有力候補。朱立倫党主席が立候補しないことを何度も明言していただけに、朱主席も含めて立候補を促す声が大きかった。馬総統はそれが気に食わない。なにしろ二年前、馬主席は王院長が野党議員に頼まれて検察のトップに電話し、口利きをしたと暴露し、党の規律委員会で除名を決めさせた。

王院長は比例代表の立法委員(議員)で、除名で党籍がなくなれば、立法委員は辞めなければならない。立法委員でなくなれば、当然、院長(議長)は失格になる。「王院長は不適任」と馬総統は非難し、断言していた。口利きは電話の盗聴で分かったもので、議長や検察の電話まで盗聴しているのかと問題になった。王院長は党籍確保の仮処分を申請、裁判になった。

これが「馬王の戦い」。結局、裁判は一審、二審ともに馬総統の敗訴。三審もあるが、上訴するかどうかは党主席が決める。今春がその期限だったが、その前に主席は馬総統の主席辞任で朱主席に交代し、その朱主席は、上訴せず、馬総統の敗訴が確定した。加えて王院長が次期総統選の党公認候補となったのでは、馬総統は踏んだり蹴ったりと思ったのか、党内予備選の立候補締め切りの前日に日本食品の輸入規制を実施した。それをみて王院長は立候補を正式に断念した。馬総統は一矢報いた格好だが、馬総統の私的な暗闘が日本にとぼっちり。これが一国の指導者のやることなのか。台湾を中南米かアフリカの後進国と似たような国にしている。

国民党総統候補、二線級の戦い

王院長の立候補取り止めで国民党は有力な総統候補がいなくなってしまった。馬英九総統の

任期は2016年5月まで。すでに二期目なので憲法の規定で三選はできず、退任する。国民党は新たな候補を決めなければならない。最大野党、民進党は一部に異論はあったが、「早く準備したほうがいい」という蔡英文主席の決断で二月の春節(旧正月)前に党内予備選を実施、結局、立候補者は蔡主席だけで、蔡主席を公認候補とすることを早々と決めた。

国民党は順当なら党主席である朱立倫・新北市長だが、本人は「市長の任期(2018年末)を全うする」と固辞。呉敦義副総統は年末の主席選挙に立候補せず、総統を狙っているのではという声に「主席にも総統にもならない」と明言していた。前言翻して党内予備選に出れば、「白賊義」(嘘つき敦義)のあだ名があるだけに「やはり嘘つきだ」と、またまた信用を落とすことになる。

有力と思われた朱主席、王院長、呉副総統の三人が結局、立候補を見送り、そして誰もいなくなった……となるかと思われたが、女性の洪秀柱立法院副院長が名乗りを上げ、さらに元衛生署長の楊志良氏も立候補、さらに無名の桃園県政府の元役人までも出てきた。洪副院長、楊元署長はそれなりの人物ではあるが、二線級。これでは民進党の蔡英文主席に勝てるはずがない。馬英九総統が引き戻した政権は再び民進党に持っていかれてしまう。後継者を作れず、企業でいえば会社を潰すことになる。これではリーダー失格だ。

そこで立候補締め切りの直前、王院長の立候補を断念させた馬総統は、今度は朱主席に対して立候補を促した。それも「党の責任者としてここで逃げるのは無責任だ」との趣旨の発言で、命令するような激しい言葉で、馬総統がよく言う党内民主化など無視。それでも朱主席は立候補しないと断言した。

もともと馬朱関係は良好だった。2009年に馬総統は朱主席を行政院副院長(副首相)に起用したことがあり、当時は「馬総統の後継者は朱立倫」と盛んに言われた。実際、朱主席は馬総統の前では忠実な部下を演じていた。それが新北市長に当選し、人気が出てくると、岳父が馬総統離れを意図してか、「9%総統」と呼ばれ、極端に低い支持率の馬総統批判を始めた。決定的なのは今春、馬王の戦いで、上訴せずに馬総統の敗訴を確定したことだ。これで馬朱間の亀裂がはっきりした。

馬総統からなんと罵られようと、負け戦の様相の総統選には出ないという朱主席の決意は固い。立候補締め切り後に「予備選で選出された候補を全力で支援する。勝てば、当然、主席の座を当選者に譲る。負けたら主席として引責辞任する」とどちらにせよ来年一月までの主席であることを宣言した。六月で 54 歳。若いだけに国民党の党勢が回復するのを待って次の次、2020年の総統選を狙っているのではないかと観測されている。

順当なら民進党だが、国民党に奥歩(アオボ)がある

結局、立候補は二線級の三人。それでも党規約に従って立候補しているから、ノーとは言えない。この中から選ぶしかない。国民党では主席選挙は何度か行われてきたが、総統候補を選ぶ予備選挙は初めてのことだ。いろいろと壁がある。まずは立候補しても3万人の署名を集めなければならない。結局、この最初の関門で、楊志良元署長と無名の役人は落伍、通過したのは洪副院長だけだった。

これで洪水副院長が総統候補に決まりかという、まだ関門がある。次は世論調査。30%以上の支持率を得なければ、候補になれないが、洪副院長は何とかクリアしそう。ところが、ここで奥の手が出てきた。世論調査は単にその人の支持率ではなく、対比式にするという意見だ。民進党の蔡英文主席に対して洪副院長の場合は○%対○%、朱主席なら○%対○%という調査。

立候補してない人まで出してくるのは「不公平だ！」と洪副院長は怒る。当然だろう。

それでも洪副院長が30%以上の支持率を得て、対比式でもトップなら、来年の総統選は女の戦いになる。洪副院長が30%未満で、トップにもなれなければ、候補者なし。そのときは党中央が党員を指名する。指名された人は拒否できない。拒否すれば党除名だ。ここに消えたはずの朱主席が復活してくる可能性がある。そして指名で力を発揮するのは党内実力者、つまりは馬総統。馬総統は王院長の裁判で上訴しなかった朱主席を外して呉副総統を推すともいう。そうならばダークホース中のダークホースだ。

党内予備選は党の規約に明記してあるが、初めての経験だけに詳細は不明なところが多い。そこに実力者の恣意が入ってくる。台湾ではこういうことはよくある。今の朱主席も正しくは主席ではない。党の規約では「党員の総統在任中は党主席を兼任する」。昨年統一地方選挙の惨敗の責任をとって馬総統は兼任していた党主席を辞めたが、これは違反だ。朱立倫新北市長が主席に当選したとき、この党規約改正が一時言われたが、非常時ということなのだろうか、今は誰も言わない。

その昔、「俺がルールブックだ」と言った野球の審判がいたが、今の国民党はそれに似ている。党内の規約だけでなく、国の司法さえ変えかねない。その法を曲げているような実例がある。分かりやすいのは陳水扁前総統の自宅療養だ。獄中で他界されたら、暴動が起こる可能性大。だから自宅療養を認めた。陳前総統以上に弱っている受刑者はたくさんいる。その人たちやその関係者の間からは「不公平」との批判が出ている。これも当然のことだ。

もう一例。前回、2012年の総統選挙では再選を狙う馬英九総統に対して蔡英文主席が善戦したが、馬英九陣営は選挙戦終盤に「奥歩(アオポ)」と呼ばれる汚い手を使って、蔡主席を追い落として勝った。その奥歩の一つは蔡主席が国策会社のトップ在任中、その株を大量に売却して巨利を得たと公文書を偽造して、でっち上げた。当然、蔡主席の支持率は低下した。

株は国策会社設立のため蔡主席が求められて出資したもので、売却はトップを辞任後のことで、それも当初からの約束だった。それを在任中に売却したように文書偽造した。それをしたのは当時の経済建設委員会主任委員、日本でいえば経済企画庁長官のような高官だった。その高官は馬総統再選後、財政部長(財務相)に昇進した。もちろん捜査当局は動いたが、結局誰も断罪されることはなかった。

馬総統が誕生し、国民党が政権を奪還して七年。陳水扁前総統の民進党政権はすばらしかったとはいえませんが、少なくとも民主化に向かおうとしていた。しかし馬総統の七年は時代の流れを逆行させた感じは否めない。国民党の総統候補をめぐるドタバタで来年一月の総統選は、順当なら民進党の蔡英文主席が勝つ可能性は大きいですが、その前に国民党の「奥歩」、馬総統の悪あがきを忘れてはいけません。

最近の政治巷談では、総統選での国民党の敗戦が濃厚になれば、馬総統は国外脱出するだろうと囁かれています。いま、台北市内のドーム建設で馬総統が台北市長時代に便宜を図ったという汚職容疑が浮上しており、法律上、総統在任中は逮捕されることはないが、辞任すれば「不逮捕特権」がなくなる。国民党勝利なら、それこそ握り潰せるのだろうが、蔡英文総統ならそうはいかない。総統選の雲行きをみて、負けるとみれば、いち早く国外脱出を図るだろうというわけだ。

(了)